

最近の果樹栽培はスピード・スプレーヤー等の大型防除機具の普及につれ必然的に大面積の経営が主体となってきた。そうなると多くの栽培者が集まって共同で作業を進めることになるが、能率的につけても大いに結構なことである。

しかし、新しく果樹を植える場合、経営

に授粉樹が必要なわけと、混植の方法について概説してみたいと思う。

I 授粉樹の必要な理由

いかに花芽が多く着き、見事に開花してもそれが実を結ばなければ無駄花となり栽培の目的は達せられない。

この実を結ぶためには開花中に次の事が完全に行われる必要がある。

即ち雌蕊の柱頭に花粉が運ばれる授粉と、そこで花粉が発芽し花粉管を伸ばし雌蕊の花柱内を下降して胚珠内の卵核と結合する受精による結果である。

この場合りんごでは次の如き性質があるので必ずしも容易に結果し得ないものである。

(1) 花粉の不完全

果実になる雌蕊が如何に完全であつても、授粉する花粉が無能或は不完全であつては折角授粉しても花粉は発芽せずに終るので実を結ばない。

(2) 染色体数

差こそあれ七倍から十倍位結実歩合を高める。即ち同一品種のみ広い面積栽培している園では、自花授粉になり結実極めて不良となるからそのような所では必ず他品種を混植する必要が生じてくるわけである。

これを他花授粉すると品種により多少の差こそあれ七倍から十倍位結実歩合を高める。即ち同一品種のみ広い面積栽培している園では、自花授粉になり結実極めて不良となるからそのような所では必ず他品種を混植する必要が生じてくるわけである。

のを選ぶ必要がある。

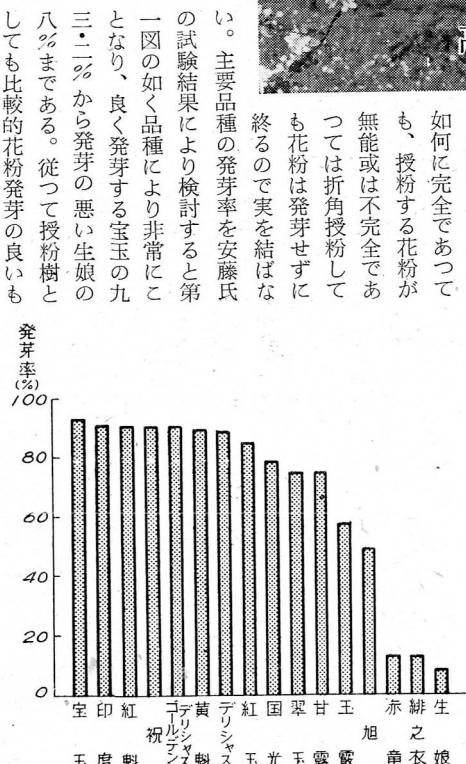
(2) 他花授粉の性質

自花と同一品種の花粉が授粉されたので精出来ない。しかし他品種の花粉が授粉されると(他花授粉という)、良く実を結ぶ性質がある。それを第一表に見ると品種により多少の差こそあれ七倍から十倍位結実歩合を高める。即ち同一品種のみ広い面積栽培している園では、自花授粉になり結実極めて不良となるからそのような所では必ず他品種を混植する必要が生じてくるわけである。



りんごの混植について

高橋正治



II 授粉樹の必要条件

授粉樹の必要条件は前項に掲げた必要理由で大体理解されたと思うので、それ以外の条件について略説する。

(1) 開花期

の合理化のみを過度に望んで同一の品種を大面積に栽培せんとする傾向があるのでないかと思う。特に農薬、農薬具の目まぐるしいばかりの進歩を見とれ、肝心のりんごの本性を理解することにルーズになつてゐるのではないか。

そこで古くから言われているりんご栽培

第1表 りんごの自花授粉と他家授粉の結実歩合

品種名	自花授粉		他花授粉	
	北海道 (星野氏)	青森 (須佐氏)	北海道 (星野氏)	青森 (須佐氏)
祝	1.3	0.1	14.9	7.1
旭	5.2	3.7	62.4	26.3
紅	5.5	7.7	38.9	42.5
国	18.0	6.7	81.1	59.6
印	—	14.3	—	38.3
デリシャス	—	0.8	—	9.7
ゴールデンデリシャス	—	—	—	37.0

